精神分析からみた歴史と社会
～モンゴルの歴史と文化と思想構造に関する考察～

アナラ・ムンフジン

要約

本論文の関心は、精神分析が語る自然と文化との対立という論点が、モンゴルの伝統的な思想である「人を人間にする」という考え方、つまり文化の中で生きていくことによって初めて人間が人間として成立するという考え方に、どのように関係づけられるかを明らかにすることにある。ここから、本論文では、精神分析理論における社会論に沿って、特定の民族、すなわちモンゴル民族の文化と歴史に潜む論理に光を当てながら、考察を進めることにする。

本稿における研究方法は、フロイトの思想における三つの神話（①エディプス王の神話、②原集団による原父殺害、③モーセとユダヤ人に関する神話）を基礎にした精神分析的社会理論に照らして、モンゴルの歴史と文化におけるいくつかの重要な論点を解釈してゆくことである。モンゴルの歴史には、いくつかの大きな変化の見られる時点があり、そこに着目して、モンゴル民族の思想構造を、精神分析理論における観念と対比しながら考察する。

本研究の着眼点を表すキーワードを挙げるならば、モンゴル歴史と文化においては「テンゲリ」、「チンギス・ハーン」、「トーテム狼」という概念、精神分析理論においては「大文字の他者」、「父の名」、「同一性」という概念となる。

モンゴルの歴史と文化からは、モンゴル民族の祖先に対する思想およその起源になる伝説、そして、チンギス・ハーンの子供時代と、彼の生涯についての物語を取り上げる。

これらについて歴史的な記録として原典となる文献には、次のようなものが挙げられる。まずモンゴルにおけるチベット仏教の受容について、その歴史的なイベントを政治的で文化的な要因によって考察した研究を参照して、精神的な要因による考察を試みる場合、特に文化面から非常に興味深い研究を遂行した内モンゴルの Jyamuyang Kaichao 氏の『モンゴル仏教の研究』（2004 年）が注目される。また、チンギス・ハーンに関する現代モンゴル民族の理想的なイメージについて、歴史家や文化人類学研究者などの研究を参考にしつつ精神分析理論における同一性の概念によって考察するに際しては、日本の島村一平氏による、チンギス・ハーンが文化的および政治的な資源として他の国においても使用されてきたという観点や、アメリカの Alicia.J.Campi の研究におけるモンゴル史の時代それぞれによってチンギス・ハーンの位置づけに特徴が見られるという考え方が参考になる。

また、モンゴル文化におけるシャマニズムの「テンゲリ」という概念について検討す

る。「テンゲリ」はモンゴルの文化と民族の思想構造において重要な概念であり、さらにモンゴル民族の思想を理解するための主な鍵とされる文化的な特徴をもつものである。モンゴル語の Тэнгэр(Tenger ローマ字での綴り）という言葉の発音は、日本語において「テンゲリ」、「テンゲル」というように異なって書かれる。本稿においてはモンゴル語の発音に最も近い「テンゲリ」という綴りを使用する。

本論文は五つの章で構成される。以下に各章における論点を紹介する。

第 I 章では、精神分析における三つの神話を背景に、チンギス・ハーンについて、彼のモンゴル民族における文化的なイメージの起源を探っていく。フロイトは晩年に完成させた『モーセという男と一神教』（1937 年）においてモーセとユダヤ人に関する仮説を構成した。そこでは、ユダヤ民族の文化と論理の形成においてモーセがどの役割を果たしたかということを精神分析の観点から論じた。一方、モンゴル民族にとって、チンギス・ハーンは、モンゴルという国を創立したことによってモンゴル民族の父親として認識される。彼は、歴史上の人物でありながら、「テンゲリ」を崇敬するモンゴル遊牧民族にとって「テンゲリの意志」によって彼らを導いた特別な存在として語られてきた。この点において、モーセとチンギス・ハーンは、それぞれの民族を民族として導いた最高の指導者であることが確かである。モーセとチンギス・ハーンのそれぞれの人は異なった時代に存在していた人物である。その点で、対比てきない点が多数あるが、それぞれの民族にとっての「父」であり、民族の心的構造において中心的な位置を占めることがこの二つの民族を対照的に考察することを可能にしていると考えられる。

『トーテムとタブー』（1913 年）において、フロイトは、原集団による原父殺害という神話を構想し、そこにおける原父と息子たちの関係を描き出した。その関係の結果として生じた精神的な衝動によって、息子が編成する新たな社会形成について理解することができる。本章では、この『トーテムとタブー』に取り上げられた原集団におけるトーテムに関するフロイトの観念を介して、モンゴル民族におけるトーテムについて解釈を試みる。さらに、そのトーテムの、チンギス・ハーンとの関連について検討する。

第 II 章では、フロイト以後の精神分析の発展の中での、アメリカのエリクソンによる同一性に関する問題設定を取り上げる。エリクソンの理論における同一性の概念は、社会における個々の人が文化という環境の中で、他者に同一化することによって、自分自身の存在性をその共同体に位置付けることを可能にする。同一性は社会と文化の環境における人間すべてにとって社会的な位置付けの可能性を認識させてくれる概念と考えられる。エリクソンの同一性概念はフロイトの自我理想の概念に基づいて形成された。したがって、フロイトの同一化に関する観念について説明することが必要になる。同一化は、理想自我と自我理想による過程として機能する。理想自我は幼児のナルシシズムによって形成される。理想自我は父親と同一化するという過程によって自我理想に関係する。この同一化の過程において父親の役割は重大である。社会における自我理想の形成は、人間を集団において他者との関係に結びつける。集団における個人にとって、自

我理想は指導者に置き換えられ、指導者との同一化によって、自分を他者に関係づける。民族的集団におけるメンバーたちは同一化の過程を介して、自我理想としての指導者に同一化することによって一つの民族であることを内面化する。

このように、本章における問題関心は、現代モンゴル社会における同一性の問題となる。社会主義から民主主義に変わった現代モンゴルにおいては、政治と経済の不安定な状況によってモンゴル人一人ひとりと新モンゴル国全体が直面した問題は、同一性の問題である。ゆえに、ここでは、モンゴル人の同一性に対する問題を精神分析理論における同一化と同一性の概念によって考察してみる。モンゴル人にとって、チンギス・ハーンは、モンゴルという国を創立させ、かれらの国民の父親として認識される。これをモンゴル民族におけるチンギス・ハーンとの同一化の過程として考察する。

論点として注意するべきことは、エリクソンの同一性概念がフロイトの同一化概念とは異なることである。エリクソンの理論における同一性の概念は、社会における個々の人が文化という環境の中で他者に同一化することによって、自分自身の存在性をその共同体に位置付けることが可能になるということを意味している。同一性は社会と文化の環境における人間すべてにとって社会的な位置付けの可能性を認識させてくれる概念と考えられる。

第 III 章においては、モンゴルの歴史において、一つの時代から次の時代に移る際にモンゴルの思想に起きた変化を中心に取り上げる。その変化を一つのコンテストの中で観察してみることが必要だと考えられる。そのために、１．モンゴルの伝統的な思想の起源、あるいは、モンゴルの遊牧文化とその起源について説明する。ここでは、遊牧民の生活は自然と親密な関係を保っているということに鑑み、それの背後にあるシャマニズムという民族の信仰の特徴を探ってみる。２．チベット仏教の受容。シャマニズム以後にチベット仏教がモンゴル民族に受容されたことを、心理的なプロセスによって説明することを試みる。近代モンゴルの特徴についても説明する。４．モンゴル民族にとっての「国家」というものの理想像、それの起源について考察してみる。この四つの点が、本章における着眼点である。

第 IV 章では、フランスに導入された精神分析の歴史を描く上で、独特の思想と精神分析に関する熱心な取り組みによって、フランスの精神分析の発展に強い影響を及ぼした J. ラカンの精神分析理論をまず解説し、その理論的枠組みを通してモンゴル思想の理解を行う。ラカンの理論のみならず、彼の精神分析運動は精神分析の歴史を豊かにした。ラカンは、精神分析の各組織との対立を越え、フロイトの理論を構造論的な思考から解釈し直した。ラカンの精神分析理論における社会論とは、人間を言語の世界における主体として捉え直し、人間の社会的な存在性を、その主体と言語の側における他者との関係において考えることである。人間が生命体として生まれ、その環境となる他者によって言語の世界（社会、文化的な環境ともいえる）にとらわれる最初の一歩について語るのが鏡像段階論である。鏡像段階論によって、人間が社会的な存在として誕生する

プロセスを理解できる。しかし、このプロセスの結果、人間には、自己と、鏡像によって形成された自我との間に亀裂が生じる。人間は社会において、新たな自分、主体としての自分を本来の自分であるかのように意識して生きていく。これが社会における人間の在り方である。だが、人間を主体として受け取る場には、大文字の他者がある。大文字の他者は、主体を言語活動において規定するものとして、主体に先立ち、その外部にあるといわれる。主体に対する大文字の他者、あるいは主体と大文字の他者との関係性を、モンゴル文化における「テンゲリ」という概念に適用して、検討してみる。「テンゲリ」は、モンゴル文化において伝統的な概念として存在してきた。「テンゲリ」は人間と自然の関係性を表すこと、ならびに人間として誕生することという二つの意味を示す概念である。誕生に関する観念にとって、「テンゲリ」は人間と父の関係において説明される。このことは、「テンゲリ」がモンゴル民族にとっての祖先の場であるという定義をしてみることによって明らかになる。「テンゲリ」は、言語においてラカンのいう大文字の他者が果たす役割を、モンゴル文化において果たす概念であると考えられる。

ラカンの精神分析理論における「父の名」概念は、主体と他者の関係において何か特定のものを示すというよりも、一つの機能として記述されるものである。ラカンにとって、機能としての「父の名」は、大文字の他者においてシニフィアンの集合の場における法としても定義される。1963 年にラカンは『父の名について』(“Names-of-the-Father”) というセミネールを行った。このセミネールでは、ユダヤ - キリスト教という一つの伝承の成立を「父の名」によって解説している。この考えはモンゴルの思想史にも適用できる。

第 V 章においては、フロイトが『文化の中の居心地悪さ』(1930 年) で論じた人間の幸福について、文化における人間の在り方という観点から考察する。精神分析の社会論においては、人間の幸福を考える際には、文化との対立について論じるのが必然である。フロイトは人間が普遍的な幸福を得るために文化というものを創ったことに対して批判しつつ、個々の人にとっての幸福を、精神分析の知見に基づく彼独自の立場から論じたのである。

本研究は、モンゴルの歴史と文化においてモンゴル民族の心的な働きをどのように分析することができるだろうという課題に、精神分析の観点から考察を進めてゆけるのではないだろうかという問題関心をもって成り立った。フロイトはユダヤ民族の論理とその形成について『モーセという男と一神教』(1937 年) という論文において論じた。彼はユダヤ民族の歴史と文化を再検討し、精神分析の観点によってユダヤ民族とモーセに関する伝説を解釈した。この解釈によって、我々は民族がもつ論理の形成とそのプロセスが人間の精神における心的な働きによって考えられることが理解できる。このフロイト的な方法論を取り入れた考察の結果、本論文では、モンゴル民族にとっての「テンゲリ」という概念とチンギス・ハーンとの関係という歴史的な事象を、これまでとは異なる視点、つまり人間の

心的な働きという視点から分析することが可能であることが示された。